

海軍

台湾従軍記

福岡県 小宮 廣

大正十三（一九二四）年三月三十日、福岡県山門郡大和村皿垣開の小宮卯佐太郎の次男としてこの世に生を享ける。家は代々農家であり、尋常高等小学校を卒業後直ちに家業の農業に従事する。出征当時は四町五反歩の水田を耕作中であり、その農業従事者は父母、妹、年雇男女各一人で、それと家族は妹一人弟三人であった。

昭和十六（一九四一）年十二月八日、大東亜戦争が始まり戦局は日々刻々激しさを増し、昭和十八年、京都帝大に在学中の長兄・栄吉も学徒兵と

して佐世保相浦海兵団に入団する。翌昭和十九年、私は二十歳で徴兵検査を受け、第一乙種合格、当時丙種以外は現役兵として出征ということとなる。この当時戦局はますます熾烈化し、大正十四年生まれも同時に徴兵検査を受け、十三年兵と同時に出征することとなった。

昭和十九年九月四日、台湾第一七九一部隊に入隊せよとの命を受ける。九月三日の早朝、先輩、親戚、友人等を招き出征の祝宴を挙げ、青年団婦人会、地域の人々多数の方々の盛大な見送りを受け、氏神様で武運長久の祈願祭を行っていた。ここで尽忠報國の決意を皆さんに披瀝、そして歓呼の声と軍歌に送られ、西鉄中島駅まで送ってもらう。出征当時の我々は国のため、天皇陛下のため

めに死すことは男子の本懐これに過ぎるものなしと信じていた。

九月四日、福岡東公園で、台湾第一七九一部隊よりわれわれを受領に来ておられた中川原隊長殿の訓辞があり、いよいよ尽忠報國の決意固まる。付添いの悟叔父に私物を渡し、これが叔父との最後の別れになるやも知れぬと思えば名残りは尽きなかった。

旧国鉄博多駅前の旅館に分宿し、数日間ここで過ごす。この間、父母はわざわざ面会に来てくれた。両親の心尽くしに有難く感謝し涙する。父母の健在を祈り万感の思いで別れる。

台湾第一七九一部隊は通信隊であり、同年兵は岡山、鳥取、島根、広島、山口の各県と九州七県から集まった部隊であることを知る。数日後、小倉の松ヶ江兵舎に移動、九月十三日夜、門司港において輸送船に乗船し、翌十四日いよいよ台湾へ向け出航する。

波荒き玄界灘を輸送船は西へ進む。博多沖、平戸沖、野母崎、天草沖、串木野沖を数日で進み、鹿児島錦江湾に到着、ここで船団を組むため数日滞在することとなる。一日、洗濯岩のある桜島に上陸、慣れぬ船旅に疲れた体に英気を養う。軍規厳しき折、鹿児島島の戦友に面会あり驚く。

程なく船団が整い、いよいよ錦江湾出航、遠ざかり行く開聞岳を遠望し、「さらば祖国よ、再び帰る日はあるだろうか」の感が胸に迫り、目には涙なり。海を見れば、ここは名にしおう大隅海峡、ドス黒い三角波、うねりはひどく、七、〇〇〇トン級の輸送船も揺れに揺れる。ここはまた敵潜水艦のよく出没する海域と聞く。ここでどれだけの同胞が征途半ばで敵潜水艦の攻撃で撃沈され無念の最後をとげたことか。我々の船団も出航と同時に敵潜水艦の攻撃にさらされ緊張の船出となる。

輸送船の歩みは鈍い。そして太平洋は東シナ海は果てしなく広い。船団は七隻位か、その船団を二隻の駆潜艇が護り、船団の周りをぐるぐる廻り

ながら護送してくれる。それがまた何と心強かったことか。

船の中は兵でいっぱい、船倉は何段にも仕切られていて人数が多くて寝る所がない。小生等はいつも甲板に出て物陰で眠った。隣にいる兵に声をかけると、それは鹿兒島の和田君であり、川西大迫君、山口の矢田君等であった。満天の星を眺め、お互いの故郷を語り、親兄弟を語ったことを想い出す。

皆だんだん船酔いがひどくなり、同年兵の中には食が進まぬ人も多くなる。食事当番や雑役も元気な者がする。幸い小生は船酔いすることもなく、お陰で元気で船旅を続けることができる。それと困ったことは便所だった。長い長い行列で腹をこわした人は難儀なことであった。小生は母が出征の時千人針と同時に竹の皮に包んで渡してくれた紫蘇と梅干、これがどれ程船旅に役立ったことか、今更のごとく親の愛情に感謝する。

船の中で訓示あり。もし敵魚雷が船に命中の場

合は早く退船のこと。船が沈むその渦に巻き込まれぬよう遠くへ離れておくことが必要である、と。遅々とした船旅は続く、なにしろ七ノットと足のろい船団である。沖繩の那覇港に着くという朝、「ドッカン！ ドッカン！」と腹を剝るような激しい爆発音に総員「スハ！ 魚雷命中か」と救命胴衣片手に甲板に飛び出す。立錘の余地もない程の混雑である。魚雷攻撃は受けたが幸い命中はせず、味方の駆潜艇より敵潜水艦を追い払うために投下する爆雷の音であったことと聞き、皆胸をなでおろす。

沖繩で船団は減る。われわれの輸送船はさらに南下、石垣、八重山群島、台湾の東岸の蘇澳まで南下し、そして台湾の東岸を北上、十月二日やつと台湾基隆港に無事到着する。

想えば長い長い船旅であった。門司を出航したのが九月十四日、到着したのが十月二日、延べ二十日間敵潜水艦攻撃の脅威にさらされての航海。今想えば命の縮まる思いの航海であった。

基隆より直ちに台北へ移動し樺山兵舎に入る。隣には台北州庁があり、周りには高等専門学校、高等女学校、兵舎等々あり、また近くには広い練兵場のある歩兵連隊もあった。このあたりは台北でも官庁や学校等のある繁華街らしい。

また台湾第一七九一部隊は電信第三十四連隊に所属する部隊で、台湾軍司令部付の部隊である。台湾軍司令官は安藤利吉大將、後に台湾総督も兼ねられた方である。連隊長殿の名前は忘れませんでした。台湾第一七九一部隊は編成されたばかりの部隊で、小生らが初めての初年兵で古年兵殿はまだ少なかった。有線中隊と無線中隊があり、小生は有線中隊に配属される。中隊長殿は芋生大尉殿であった。到着して一週間目、敵艦載機グラマン、双胴機ロッキードの空襲あり、戦闘配置に着く。何せ初めてのことであり、どうしてよいか解らず上官の命に従い退避する。途中で機銃掃射を受ける。「ブスツ、ブスツ」と風を切ってくる銃弾に肝を冷す。飛行機が真上に来れば大丈夫、遙か前方から来る

時が恐ろしかった。ここで初めて戦闘に参加し、その恐ろしさを身をもって感じる事となる。

この時が台湾沖大航空戦の時であり、小生等の基隆到着が後一週間遅れていれば、これに巻き込まれどうなっていたかと、その運のよさに皆感謝する。

そしていよいよ各内務班に分かれ教育が始まる。はじめのうちは兵としての基礎訓練が続く。それから各専門の教育となる。有線中隊とは野戦における通信網の設営を行うもので、その任務遂行には大変な体力を必要とする仕事である。

小生はその中の通信手に選ばされ「トンツー、トンツー」の教育を受ける。初めて合調音での受信教育、イ(トウ)、ロ(ジーホコウ)、ハ(ハーモニカ)、ニ(ニーヒゾウカ)、ホ(ホーコク)、ヘ、となかなか難しい。無心になって自然に頭に入るようにならなければと焦れば焦る程受信できず、助手の上等兵殿よりどなり付けられ、汗だくなく、余り汗をかくので佐藤教官殿より「小宮、軍衣を

一枚脱げ」と言われること度々であった。

教育が終わり内務班に帰れば内務班の仕事が待っている。上官殿や古兵殿の洗濯、軍靴の掃除、内務班の清掃、食事当番と目が廻る程忙しい。夕食が済み一息ホッとす。次は点呼だ。上等兵古兵殿が軍靴の検査をする。底の鋸に少し土が残っていると「これが掃除したとかア」と恐ろしい罵声が飛ぶ。揚げ句の果て軍靴を首にぶらさげ各班廻りをさせられる。情けないこと限りなし。

また誰か何かしでかすと「初年兵集合、並べ」でそしてピンタに拳が飛ぶ。今日はなんで打たれているのか解らない時が度々だ。時には班長殿が「初年兵集合、今日貴様達はこんなことを仕でかした。目をつぶり歯を喰いしばれ」バチツバチツの連続、目の前でバチツと一発痛くない「一同、目を明ける。痛かったか」初年兵一同自分は打たれていない。班長殿は自分の手と手でバチツバチツと音をたてる人情味に豊かに溢れる班長殿もおられた。

台北州庁より台湾神宮に続く三線道路は格好の訓練場であった。ここで度々早駆けが行われた。距離は往復約四キロ位か。時には武装しての早駆けもある。小生は百姓育ち、早駆けには遅れはとらじといつも完走する。落伍者も出る出る。助手の上等兵殿よりどやされどやされ少し強くなつて行く。しかし同年兵の中にはいろいろの訓練についてゆけず脱走者も出る。彼は後日淡水港で発見されたと聞く。その後の消息不明である。

昭和二十年の新年は樺山兵舎で迎える。お祝いの雑煮とお酒もいただき、兵舎は一日賑やかな雰囲気であった。

年が明けてから、台北にも時々敵機が飛来し爆弾を投下するようになる。聞くところによれば台湾は屏東、高雄、台南、台中、嘉義、新竹と下より順に激しい空爆を受け、主な軍事施設や官庁が次から次と破壊されたと聞く。二月に入り台北も度々空爆を受けるようになる。味方の飛行機の応戦もなく、高射砲も飛行機の方が高度も高く命中

せず、敵機はいつも悠々と来襲する。松山飛行場も度重なる空爆で破壊し使用不能となる。

こんな状況で我が台湾第一七九一部隊も、遂に都会の中心である樺山兵舎より郊外のジウゴフンに疎開の命令が下る。この地は田舎、周囲は田圃と山である。近くで本島人の農夫の働く姿も見られ、水牛で田をかき田植えるノンビリとした姿も見受けられ、今更のごとく故郷を想い出す。そして父母健在なりやと懐古する。

暫時、防空壕掘りに懸命に努力する。そしてまたトントントントの訓練が続く。建設手は毎日毎日真っ黒になって、山中の有線網設置の訓練に必死の模様である。

一日、上等兵殿と公用で台北へ出張し任務を済ませ一六軒（台北一の菓子舗）に立ち寄りアイスクリームを食す。そこに一団の少年兵がいた。先輩は「あれは陸軍航空隊の飛行兵で特攻隊員だ」と。彼らは台湾酒を酌み交わしながら話はずんずんしている。その中で「我々は死ねばいいでしょう、

死ねば」という話が耳に聞こえてくる。見ればまだ自分達より若い十七、八歳の年配だ。祖国のため悠久の大義に殉ずる彼らの気持ちを想うとき、胸にズシンと来るものがある。

後日、彼らの飛び立つ特攻機が度々見える。沖縄の敵艦に突っ込んで行くのだ。決死の彼らの出撃、敵艦撃沈を心から祈って止まない次第であった。この頃はもう制空権も制海権も完全に敵の掌中にあり、敵の戦術は意のままのごとくであった。

教育が済めばまた内務班の勤務が続く。先輩殿の衣服を洗濯し、干し、演習から帰り、取りに行けば洗濯物は無い。盗られたのだ。それを上官殿に訴えると「馬鹿もん、ボサツとしとるけん盗られるのだ」と反ってどなりつけられる。娑婆では人の物を盗った者が悪いのに、ここでは盗られた者がどなられる、困ったところだ。員数をつけるため自分も盗って来なければならない。員数員数

の厳しきところである。

四月に入り、敵は沖繩に上陸との戦況を聞く。台湾軍司令部勤務の先輩の話によると「ナマ電で艦砲射撃のドカンドカンドカンとその射撃の凄さを伝えて来る。それはそれは沖繩は大変な激戦になっっているらしい」と。台湾は果たしてどうなることか。

この頃、本島人も入隊して来る。戦局いよいよ厳しくなり台湾軍の一員として台湾防衛の一翼となす。これで初年兵も入隊し内務班の勤務も少し楽になる。通信手の教育も進捗し、送受信も一分間に百字位送受信できるようになり、暗号文の解読も教育される。

四月に入って敵B 24の空爆いよいよ熾烈となる。しかもこれが定期便で、午前十時頃になると必ず日課のごとく南の方より編隊が悠々と飛来し、水平爆撃で爆弾を落として行く。迎え撃つ戦闘機なし。高射砲は命中せず、無念の思いで口惜しい

こと限らない。しかも軍事施設を的確に破壊しているらしい。「サツ、サツ、サツ」と空を切って落ちて行く爆弾、燃え上がる台北の街、それが遠望され、口惜しき思いでいっぱいであった。

五月、やつと一期の検閲が終わり勤務につくこととなる。一日、軍のトラックで北投草山に遊ぶ。ここで今までの厳しい訓練の疲れを癒す。北投草山は台湾唯一の温泉場で、台湾であつたからこそ、このような休養ができたことと思う。この時、兵は思い思いの持ち歌を披露する。熊本の児玉君が発表した民謡「田原坂」、朗々とした名調子が今でも耳に残っている。今彼は健在なりや否や知らない。

敵機の空爆は定期便となる。制空、制海権全く敵の手中にあり、祖国の苦戦がありと感じられる。

忘れもしない五月三十日、一期の検閲が終わり初めての外出が許可となる。われわれは喜び勇み三々五々台北の街へ出掛けた。目指す所は軍人食

堂だ。ここでは兵に腹いっぱい飯を食わしてくれ
る所と聞いている。当時軍の食卓はご飯の量も少
なく、いつも腹ペコペコで、おかずはヘチマの塩
汁ぐらい。軍人食堂はちよつとした公園の中にあ
り周囲には民家もある。到着して驚いたことに兵
でいっぱいだ。当然順番待ちする。

その時突然、空襲警報が鳴り響く。時間をおか
ずグラマンの超低空での機銃掃射を受ける。「プ
スッ、プスッ」とあの気味の悪い空を切る音が波
状的に次から次と来襲する。突然「ドカン、ド
カン」と爆弾投下の音。これはロツキード双胴機
よりの爆弾投下だ。敵機は軍人食堂を目標に集中
攻撃だ。小生等は逃げることもできずここらうつ
伏せる。

やつと敵機去り、顔を上げてあたりを見ると、
あたりは濛々たる白煙、何も見えない。しばらく
して白煙薄くなりあたりを見て、アツと驚く。今
まであった軍人食堂は無惨にも破壊されている。
そしてあたりは地獄だ。腕や足のない人、腹が破

れ内臓が飛び出し、断末魔の苦しい呻き声を出し
ている人、頭が割れ血をかぶり即死している人。
足と体が慄えた我が身はと撫でてみる。どこも痛
くない、助かったとわれと我が身を撫でおろす。
そして隣に同じく伏せていた戦友が呻き声を上げ
ているのに気付く。彼は足に被弾していたのだ。

この空爆で多くの死傷者が出る。我が中隊の古
兵殿も三人戦死され、同年兵も数人被弾し入院す
る。この日は台北大空襲でB 29より五〇〇キロ爆
弾が至る所に落とされる。三階建ての威容を誇つ
た台湾総督府もメチャメチャに破壊され、三日三
晩燃え続け、地下室に避難した多数の人々が焼死
したと聞く。道路に爆弾の落ちた地点はまるで阿
蘇の噴火口を思わせる巨大な穴が見受けられた。
小生等は命からがら原隊へ帰る。

かくして空爆はますます激しくなる。そして我
が隊の兵員もだんだんと増加する。聞けば「南方
要員として輸送船で航行中、バシー海峡で敵潜水

艦の攻撃を受け、船団の多くは撃沈され、私達の乗った輸送船は難をのがれ、命からがら高雄港に上陸し、台湾軍に編入され、この部隊に配属されました」と。これらの話を聞けば南方の戦況は最悪の状態ではなからうかと想像する。三十歳以上の兵であり、我々若い者に「古兵殿、古兵殿」と頭を下げる姿を見ると、何と可愛相な気がする。その中にはいろいろの職業の人もおられるようだ。しかし兵は一日も早い人が上であり、階級の上の人の命に従うのが軍規であった。

月日の経つのは早いもので、台湾に上陸し早くも十カ月が経つ。同年兵の中には幹部候補生となった人もいる。大分県の田村君もその一人だ。同じ九州人で「小宮、田村」と呼び合い、気の合った戦友であった。なかなか気骨のある人物で同年兵の中ではやはりリーダーであった。幹部教育を受け幹部としてようやく活躍する時期に病に冒され、入院し戦病死したと聞く。人の命とは儚いものだ。衷心より哀悼の意を表明する次第である。

また五月三十日の台北大空襲の際感じたことがある。人間の運命とは不思議なものである。同じ所にしかも何の遮蔽もない所に伏せていても、かすり傷一つおわぬ人もあれば、被弾する人あり、また防空壕に入って待避していても直撃弾を受け命を落とす者あり「命とはその人の運命であり、どこにいても死ぬ時は死ぬ」と度胸が定まる。

一日、上官殿と台湾軍司令部に向向したことがあり、ここは巨大な要塞でコンクリートの一〇メートル、その上は土で山になっている。大きな爆弾が投下されてもびくともしないであろう。ここから台湾軍全軍に指令が出ている。偉い方が多く、敬礼ばかり多く緊張の連続であった。

六月、七月は台北の街の整理の使役が多かった。空爆は本島人の住む地域には殆どなく、空襲の時は本島人の街に行けばよいといわれていた程であった。

八月十五日、重大放送が行われるので兵舎の前

に集合せよとの命令あり、全員整列する。そこでラジオから流れてくる玉音放送を聞く。放送ははつきりと聞きとれず、しかし皆日本は戦争に負け、たらしいことを覚る。その後本島人の兵がそれぞれ勝手に帰り始め、やっぱり日本は負けたのだと実感し、さて今後の我々はどうなることかと心労する。

しばらくはジウゴフンの兵舎で過ごす。ここで武装解除を受け、武器弾薬は一カ所に集められ、所定の場所へトラックに積み込み持って行く。

ここでまた命令が下る。「台湾では治安維持のため敗戦国日本で唯一の軍隊を残すこととなった。そこで君達はその任務に当たれ」と。小生最右翼で任命され、各中隊より数十人選抜され待機する。しかしこれは構想だけで終わる。

その後すぐ蒋介石の直系軍が進駐して来る。しかしその兵の装備たるや日本軍から見ればお粗末なものだ。兵は草履ばき、下士官で軍靴という程度だ。しかし蒋介石軍が直ちに台湾全土を掌握す

る。これについては台湾本島人には反発があったようだ。そして直ちに治安維持に当たる。当時日本人の若い女性は慰安婦に出さねばならぬとの流言が飛び、若い娘さんで自殺した人も出たと聞く。しかし直系軍の軍規は厳しく不祥事は余り聞かなかった。

しかし台湾巡査の受難は聞いている。巡査は村では村長の次に座る地位にあつたのであまり理不尽な振舞をした人は本島人から襲撃を受けたことがあつたとのことであつた。

しばらくすると軍人はそれぞれ自活の道を見つけて、自分自身で生活せよとの命が下る。理由は軍の食糧その他が貧しくなり、補給の目途がたはずとの事。さあこれには皆困惑する。小生は叔父が台中の斗六郡で台湾巡査として勤務していたことを思い出し、連絡しようとするも住所不明で連絡つかず困る。ところが幸か不幸か、身体の具合が悪くなり、発熱がつづき、入院治療と決まる。以後入院生活が続いた。

その後日本軍は一カ所に集められ收容者としての生活が始まる。病癒え昭和二十年暮れに原隊に復帰する。原隊の收容所は台湾神宮下の元丸山陸軍病院であった。部屋には人数が多く狭苦しいが、收容者の身文句は言えない。時々中国側より使役の命ありそれぞれ交替で出役する。また日本軍は公会堂に集められ、中国の三民主義の講話を聞かされる。台北近郊にいる各部隊より二千人程集合する。

また收容所を監視する中国兵と日本の不寝番が筆談した話を聞かされる。中国兵曰く「私日本兵本当に憎い、父母を日本兵に殺された、しかし蔣総統は、仇を恩で返せと命令された」と、この言葉を聞き中国の指導者の偉大さを知り、この命令があつたればこそ大きなトラブルは起こらなかつたと感銘する。

年が明けて、急遽日本人を本国へ送還の話が持ち上がる。敗戦直後の頃は台湾の引き揚げは後、

まず極寒の迫る満州からということをおつた。それが変更となり、引揚船が台湾へ来るということとなり、俄に兵に活気が出る。引き揚げはまず兵よりと、ここでまたこんな風聞が流れる。

「兵隊の妻は兵隊と同時に優先的に早く帰ることがができる」と。そこで仮の妻とさせて下さいとの申込みを受ける人が多く、小生にもその相談があつたものの気の毒とは思いつつもお断りする。

五十万とも六十万ともいわれる日本人の総引揚げ、乗船は基隆港、高雄港よりと決まる。ところが我が通信隊は基隆に移動せよとの命令下る、そして通信隊は日本人の総引揚げが終了するまで残留し、邦人の引き揚げの使役に従事せよとの命令である。

引揚船が到着する度に何千人という邦人が集まり、埠頭で荷物の検査が行われる。持ち帰ることのできる荷物は一家に二個であつた。その荷物を埠頭に拡げると中国側の検査官が逐一検査し、目ぼしい物は取り上げられることもあり、また不審

な者は身体検査もされる。周りには銃剣をつけた監視兵がおり、敗戦国の悲しさはどうすることもできなかつた。

持ち帰るお金も一人いくらと決められていた。今まで長い間台湾に在住し、その地位や努力で築きあげた財産のすべてを投げ捨てての引き揚げ、それぞれ万感の想いで乗船されたことと思う。引揚者の中には日本本土を知らぬ、いわゆる湾生の方々も多くおられた。検査が済むとそれを荷造りし船に積み込むのがわれわれの仕事だ。引揚船が着く度にその使役に汗を流す。

昭和二十一年三月十四日、邦人の引き揚げも最終便となる。われわれもその任務を終了し、引揚邦人と共に乗船する。一年と六カ月のあいだ在住した思い出多き台湾に別れを告げる日が来た。ふと今後の台湾はどうなるのであろうかとの想いが心をよぎる。

台湾とは本当に良い所である。まず民情がよい、

本島人の人は一度信用したらとことん信用してくれた。また気候も良い。直射日光は熱かったが木陰に來ればカラッとした涼しさで、日本の内地のように蒸さない。冬も暖かで、物は豊富だ。お米は二期作、バナナ、パイナップル等砂糖も沢山とれる。まさに台湾は宝の島である。また、いつの日にか訪れる日があるだろうかと名残を惜しみつつ基隆港を出港する。

さらば台湾！

やはり太平洋は広い、往けども往けども波また波、しかし帰りは敵潜水艦に攻撃される心配のない船旅、元気で祖国へ帰れる嬉しさ、戦いに敗れて帰るけれども暖かく迎えてくれるであろう祖国、船足が遅き思いであった。

太平洋の波は高い、引揚船は揺れに揺れる。引揚邦人は慣れぬ船旅に疲れ果て、アツチにゴロゴロ、まるで死んだ人のようだ、しかし子供は案外と元気であった。

ここでまたこんな事もある。九州出身の古兵殿

達「オイ初年兵の諸君、君達を無茶苦茶に鍛えたあの班長殿を太平洋に泳がせてみないか」と、本気とも冗談ともつかずけしかける。その話を知ってか知らずか、その班長殿は日本の港に着くまで引揚邦人の中に紛れ込んで姿を見せなかった。これで良かったと胸をなでおろす。

基隆を出航した翌日か、海の上にそそり立つ島影が見える。鹿児島出身の戦友が「アツ屋久島だ、屋久島が見えたぞー！」と大声で叫ぶ。皆甲板に出て祖国の島を眺め感動する。もう鹿児島港は近しと。しかし船は更に進路を東にとり着岸した所は紀州の田辺港であった。やっと日本に帰り着く。戦いに敗れたりとはいえやはり日本の山河は美しい、青松白砂なんともいい難き趣あり。またモンペ姿ではあるが娘さん達は奇麗である。今まで本島人ばかりみていたので余計奇麗に見えたのかなと思う。

ここに上陸、DDTを頭からかけられ、身体検査あり、そして除隊手続き等が行われた。

三月十八日、ここで除隊となり、数日後それぞれ故郷へ帰還することとなる。一年半共に過ごした戦友、先輩に別れを告げ、またの再会を約束し、いよいよ田辺駅より汽車に乗る。京都で九州行き汽車に乗り換える。ポロ汽車、しかも満員でこつた返し、窓から降りする有様。大阪も焼野原、広島は原子爆弾で何もない。百年間は草も木も生えぬと聞く。北九州福岡、久留米は夜で何も見えず、懐かしの大牟田に真夜中に着く、そして西鉄電車の中で眠る。

朝、目が醒めてアツと驚く、大牟田市がない。空襲でやられ焼野原、駅から有明海が丸見えだ、これでは戦いに敗れた筈と納得する。

一番電車で故郷へ向かい、西鉄中島駅に降り立つ。一年半前大勢の皆さんから見送っていたいた駅は昔のままだ。中島の町も昔のままの姿に少し安堵する。急ぎ足で我が家へ向かう。途中幼友に出会う。彼は内地勤務で終戦と同時に帰還し、今県の農協に出勤中とのこと。友より我が家の両

親ほか健在なりを聞き、嬉しさがこみあげ、俄に元氣が出る。

我が家の戸を開け「唯今、戻りました」と大声を上げた。出迎えてくれたのは幼い弟二人、一年ぶりに見る弟達も突然のことでビックリしたが飛び付いて来る。声を聞いて出てくる筈の父母の姿が見えず、聞いてみると親戚の従兄弟の結婚式へ出席、妹も泊まっているとのことである。「廣、帰還」の報せに取るものもとりにあえず帰って来て小生の無事帰還を祝福してくれた。

今想えば父母の一念、我にかかり、無事帰還することを念じて下されたそのお陰だと思ふ。謡曲、国栖の故例に倣い、小生出征に当たりわざわざ矢部川の鮎をとりよせ祝の膳にそえてくれた。鮎は生まれた所に必ず還ってくる謂れありと。

帰還して間もなく聞かされたことは僅か十五戸の集落の中で八人の先輩が戦死されたこと。これら先輩方は、ビルマで、比島で、ガダルカナルで、また騰越で散華されたと聞く。幼い頃よく遊んで

いただいたことを今更のごとく想い出し、心から哀悼の意を表しご冥福をお祈りする次第である。

また妹等の話を聞くと、大牟田空襲の際は、前のお宮の鳥居の下を潜ると思うくらいの超低空で敵機は飛んでいった。自分達は用水堀に飛び込み、柳の下に隠れ、それを見送った。それはそれは恐ろしいことであつた、と。またいつか焼夷弾が家に落とされるかわからないので、食糧のお米は田圃の岸に雨に濡れぬよう積んでおいたということをお話してくれた。

学徒兵として出征していた兄も海軍航空隊付士官として内地勤務で終戦を迎え、直ちに帰還、現在また大学に復学中とのことであつた。

帰ってみれば、出征当時四町五反歩の農地も一町二反歩の小農となつていた。しかしこれは我が家ばかりのことではない。敗戦国日本の皆さんが誰もが味わう苦渋であつた。かくして我また父に従い共に食糧増産に精を出す。

戦後五十九年、台湾のこと今夢か幻か。我今齡

八十歳である。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十九年、二十歳で徴兵検査を受け、第一乙種合格、同年九月四日、台湾第一七九一部隊に入隊せよとの命を受ける。台湾第一七九一部隊は第十方面軍通信隊で電信第三十四連隊に所属する部隊であった。九月十三日夜、門司港着、翌十四日、台湾へ向け出航した。台湾軍司令官は安藤利吉大将で、後に台湾総督も兼ねられた方である。

同部隊は編成されたばかりの部隊で、執筆者たちが初めての初年兵で古年兵は少なく、本人は有線中隊に配属され、通信兵教育が始まった。

当時の台湾は、比島方面の戦況から、昭和十九年末以来、戦備の補強に努めていた。特に比島決戦に備え、台湾から第六十八旅団、第二十三師団、第十師団等を次々と転用され、台湾の

防備の強化は焦眉の急務であった。このために中国戦線から一個師団を、一月には台湾の軍司令部と五個の独混旅団を新設し、さらに中国南西諸島、満州よりそれぞれ一個師団を台湾に増派し、強化が行われた。

また航空部隊も作戦準備を促進し、陸海軍共に航空戦力の一部を台湾に転用し、特に特攻部隊の造成と航空基地の増強にも努めている。

筆者は、このような時期に台湾に入隊させられ、到着して一週間目に、早くも敵のグラマンやロッキードの空襲を体験する。

当時、敵の機動部隊は、十月九日に沖縄東方の南大東島に艦砲射撃を、十日には沖縄はじめ宮古島等の南西諸島に対して延べ約四百機の猛爆を行うなど海域は緊張した。そして十一日、敵の機動部隊はルソン島北端のアバリを攻撃、反転して十二日、台湾一帯に大挙して来襲した。即ち延べ約六百機に及ぶ敵機は、南台湾、馬公

に主力を、一部は北台湾を攻撃し、高雄、馬公においては船舶及びその施設に大きな損害を与えた。

ここにきて連合艦隊は「基地航空部隊、捷一号、捷二号作戦」を発動し、瀬戸内海に位置していた母艦搭載兵力を第二航空艦隊に増加するなど、台湾方面の戦局に対処した。

敵の台湾空襲は十三日も続き、十四日の偵察によると、敵機動部隊は東南方に退避しつつあることが確認されたが、同時にこれを掩護するように支那大陸からB 29が約百機、台湾に來襲している。

このように執筆者の到着以来台湾は敵機の攻撃にさらされた。台北州庁より台湾神宮に続く三線道路は、武装しての早駆けが行われた訓練の場でもあったが、昭和二十年に入っても台湾への空襲は続き、部隊は郊外に疎開して防空壕掘りが始まる。

その後の台湾は、筆者が記録するように、

『かくして空爆はますます激しくなる。そして我が隊の兵員もだんだんと増加する。南方要員として輸送船で航行中、バシー海峡で敵潜水艦を受け、難をのがれた兵士たちが台湾軍に編入され、この部隊に配属された』と。
南方の戦況が最悪の中での台湾の状況であった。

終戦時の在台湾部隊人員

陸軍	一二八、〇八〇人
海軍	四六、七一三人
計	一七四、七九三人